



▲残雪に輝く祁連山脈の雄姿が美しい。バスの左手後方から、いつまでも追いかけてきた。張液からこの山脈を越えて青海省の西寧にいたる山路がある

▶まだコンクリートに覆われていない空き地で、屋台の物売りが店を開いている。大きな「鑲牙」(入れ歯)の看板がおもしろい。中国の田舎では、露天の歯科医はめずらしくない



長城を行く 第十一回

山丹



寧夏回族自治区の銀川から内蒙古との境界を南進してきた長城は、甘粛省の白金市に入ったところで西に向きを変えた。ここで黄河とわかれ、農業遊牧境地域帯から離脱してゴビの沙漠に突入する。

河西回廊に入ったバスは、蘭新高速を武威から山丹にむけて疾走する。蘭新とは蘭州の「蘭」と新疆ウイグル自治区の「新」のことで、ウルムチ經由カザフスタンやキルギスなどの中央アジア諸国に通じる大動脈である。

砂漠の郷鎮をいくつかり過ぎていく。街並みが終わると樹林や牧草地が少なくなり、やがて石ころだらけの荒野になる。さらに走ると、ふたたび草木が深くなつて集落があらわれる。古来、西域の広大な沙漠地帯はオアシス都市で結ばれ、そこを人がたどつて

東西の文化が交流したのだ。

右手の車窓には内蒙古自治区との境をつくる山並みが幾重にもつらなり、そのふもと近くを長城が西進している。土長城である。渤海湾沿いの山海関以来、漢界と夷界の融合地帯を進んで漢民族の居住地域を遊牧民の襲撃から護つてきた長城が、ここにきてなぜ農業遊牧境域線のはるか西北に位置するゴビ砂漠に侵入してきたのか。それは漢民族王朝が西域に興亡した西遼(カラ・キタイ)や西夏などを激しく恐怖し、みずからを防衛するための戦

略的な建造物として長城を位置づけてきたからだろう。

砂漠を驍進する細長い長城は、まるでゴビをのたうつ巨龍が西域の異民族を追い払っているかのように見える。バスの左手後方には、残雪に輝く祁連山脈の雄姿がいつまでも後を追って来る。この山もまた漢民族の居住地域から吐蕃を遠ざけた天然の要害であった。

山丹まであと十数キロという辺りで、高速道路と長城が交差している。このため巨龍の腹部はぼつかりと削りとられ、そこを蘭新高速が貫通していく。切断された場所は長城口と名付けられ、あたかも以前からあった名勝のように装われている。世界遺産を破壊して道路を通したので、その照れ隠しに付けた名前であろう。

蘭新高速を降りたバスは山丹の街区に進入していく。山丹は古名を「甘州」と称した張液に属する小県である。張液の西には夜光杯で有名な酒泉があり、そこは近代以前まで「肅州」とよばれた。甘粛省はいままでこそ省都を蘭州に置いているが、軍事戦略の上で西域が重要だった過去の時代においては、この地域の中心はあくまでも

甘州と肅州だった。現在の甘粛という省名は、これら2都市の頭文字を重ねて付けたものだ。

長距離バスセンターにほど近い山丹賓館に旅装を解き、付近の散策に出る。歩いてまわることができる大きさの町らしい。中国の中小都市がどんだんコンクリートやアスファルトで覆われていくなかで、山丹にはまだあちこちに土の地面が残り、そこに露天商が店を開いて客を集めている。むかし懐かしい中国の風景だ。ファストフード店に入る。メニューを見ると、咖喱飯(カレーライス)があるではないか。ずつと粉食地域を旅してきたので、米飯が嬉しい。山丹は輪郭のはっきりしない田舎町なので、カレーライスの想い出だけが深く印象に残っている。

翌日、張液にむかう公路の左手にも土長城がうねっていた。山丹は西域における長城の宝庫といえよう。バスに乗ってそんな風景をながめていると、自然環境が苛酷な砂漠の道行きを巨龍が並走してくれているような気になるのである。

中村達雄(なかもら たつお) ◆ラジオペキン、オリンパス、博報堂などに勤務し、中国に16年間駐在する。現在、明治大学非常勤講師。